特集

時代を越えて伝承する物語。

9月18日、夜――。暗闇の中ライトアップされる瑞龍院境内。町無形文化財「高玉芝居」が、芝居の発祥の地で60年ぶりに上演されました。

生きる文化「高玉芝居」

高玉芝居の発祥は江戸時代後期とされており、そこから今日まで200年以上の歴史を歩んできました。

近年では、毎年「釜ノ越サクラ」や「さくらの里文化伝承館（蚕桑地区コミュニティセンター）」、各地の祭りなどで上演され、地域内外を問わず多くの方から愛好されています。

しかし、芝居の発祥当時は今とは違い、財政不足による質素倹約、歌舞音曲禁止の世。そのため昭和29年までは、勢力庇護のあった瑞龍院でひそかに上演されていました。

その後、同寺での上演は途絶えていましたが、高玉芝居後援会（金田和夫会長）が昨年から企画を練り、瑞龍院上演実行委員会を組織してこの度の公演につながりました。

蘇（よみが）えった歴史

公演当日は、歴史的な瞬間を目の当たりしようと、当初の予定を上回る300人以上が来場。中には、開演の2時間以上も前から席を確保する人の姿も見られました。

一方、その裏側。ピリピリとした緊張感に包まれる楽屋の中では、高玉芝居を継承する劇団「高栄会」（児玉敏座長）の団員たちが、それぞれに集中した面持ちで化粧を始め、開演に向けて準備を進めていました。